

原発県民投票と関連団体の歴史的経緯

佐久間章孔

2011年5月『みんなできめよう「原発」国民投票』が設立された。（静岡県内では水口健司・小笠原学・久保田誠司・成澤聡・海野菜々美（海野氏妻）・東山浩子・山田勝義・大井道子・鈴木望・

佐久間章孔～おおむね加入順～各氏など80名が参加）

（またその6月、静岡市で『菜の花パレード浜岡』が行われ静岡市の葵スクエアに250人が集まった。参加者は約50名が県内各地から集まった若者たち。あとの200名は市民運動の常連及びその周辺の人だと推測された。

9月、『みんなできめよう「原発」国民投票』の静岡県調整委員に私が就任した。今井事務局長（当時）から「東京・大阪に続き原発立地県の静岡でも県民投票請求運動を起こせないか。」という要請があった。そこで、10月から、当時の国民投票運動の県内在住者及び上記『菜の花パレード』の仕掛人若干名を勧誘し、「リンデン」という喫茶店で何度か打合せを行ったが、時期早尚論と「遅きに失した」という意見が合い半ばした。出席者の何人かは非公式参加であった。

2012年2月、今井事務局長より、鈴木望氏前（当時）磐田市長を代表者候補として紹介された。二人で面談し、代表者のポストを譲り合ったうえ、共同代表制とすることにした。

同年同月「原発県民投票静岡」発足。会員制度はとらず、来た人はみな会員・事務局会議に出れば事務局員という、「ベ平連型」としたので、発足メンバー数は不明だが、初期の事務局会議（全県）には常時10～15人前後が県内各地から参加した。この時点ですでに、東部・中部・西部はそれぞれ独自の動き方を始めていた。ざっくり言えば東部は脱・反原発団体中心。中・西部は一般県民に浸透することを狙い、中道派・無党派が全面に出た。結果的には東部は署名集めがスムーズで、中・西部はメディア受けがよかった。

鈴木氏とは、二人で懇談した結果、①～④の各点で合意した。

- 1 メディア及び県議会多数派対策上、「中道派と無党派」の集まりであることを売りにする。
- ② 期間限定のプロジェクト方式とし、県議会で議決または否決されたら、ただちに解散する。（持続型の反対運動にはならない。）
- 2 署名集めは、無党派層の原発問題への関心や事故への恐怖感が薄れてきていることが、各種世論調査を分析すると明らかなので、世論が冷めきらないうちに早急にスタートする。（県への中電の同意申請や、反・脱原発陣営内部の意思統一はいつのことになるかわからないので、待ってられない。）

（なお、世論調査分析は調査機関内部からの示唆。この分析は鈴木氏後援会の反応や、佐久間の一般市民との面談調査の感触とも合っていた。その後本県でも全国でも脱・反原発の集会・学習会・デモ・署名集め等への参加者は漸減しつつけている。しかし、再稼働について意見を聞けば「怖い」「反対」という人の割合は6～7割で変わらない。時が経てば行動する人は減るが、恐怖心は残る。原発問題も憲法9条改正問題も選挙の争点にはならないが、直接賛否を問えば反対派には十分チャンスがあるように思う。このままでは双方とも推進派にやがて押しきられるので、反対派にとっては、そろそろ直接投票で勝つラストチャンスでは？）

- 3 妨害や嫌がらせ（東京では左右両派からあった）防止のため、二人で各所に「支援要請」をして歩く。（「すみません協力できません。」とか「頑張ってください。」とか言わせれば、妨害はまずない。）結果は、右派は無視。左派は及び腰で一部が個人参加。目立つ妨害や嫌がらせはなかった。

3月21日、脳梗塞で倒れて入院することとなり、以後、県民投票運動には関われなくなってしまった。

10月28日、かねて取決めておいた通り、県民投票静岡は解散した。

その後、県知事が県民投票に好意的な発言を繰り返したため、残務整理組織を格上げして「ネットワーク県民投票静岡」を発足させた。この会で、知事からはさらに同趣旨の発言を引き出すことができた。知事は記者会見で再三この問題に言及し続けている。

また県議の大多数が参加する原発県議連の会長から、「中電より県に再稼働の同意申請が出た時点で県民投票について再検討する。」（記者会見）との発言を引き出し、現在に至る。

なお、県議との懇談の内容については、主催した「原発県民投票2015」に譲りたい。